



## 👁️👁️ みどころ

『スピリット』（06年）でジェット・リーが霍元甲を演じたのなら、ドニー・イェンは本作でイップ・マンを！ブルース・リーに武術の心と技を伝えた師匠がイップ・マン。時代は1950年。舞台は香港だ。

『スピリット』のハイライトは1つだけだったが、本作は2つ。ホン師範の死を乗り越え、イップ・マンはボクシング・チャンピオンといかなる異種格闘技戦を？あれから60年。現在のイギリスと中国の力関係を考えると、隔世の感が・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□李連杰が霍元甲なら、ドニー・イェンはイップ・マン■□

張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『HERO（英雄）』（02年）（『シネマルーム5』134頁参照）は、「十歩一殺」の剣の無名（ウーミン）役の李連杰（ジェット・リー）を主演とし、梁朝偉（トニー・レオン）が書道を通じて剣の奥義をきわめた残剣（ツァンジェン）役を、甄子丹（ドニー・イェン）が比類なき槍の名手である長空（チャンコン）役を演じた。さらに女優陣も秦王に滅ぼされ、殺された趙国の將軍の娘・飛雪（フェイシエ）を張曼玉（マギー・チャン）が、残剣と飛雪との愛や始皇帝暗殺の執念に絡んでくる美女・如月（ルーユエ）役を章子怡（チャン・ツイイー）が、演じるなど超豪華だった。他方、北京体育運動大学の同級生だったジェット・リーとドニー・イェンはともに1973年に死亡した李小龍（ブルース・リー）の死後、第2のブルース・リーの座を狙って競ってきたが、私の目にはどちらかというとジェット・リーの方が一歩先を歩いていた感がある。

本作とよく似たテイストの映画が、清朝末期の実在の武術家・霍元甲（フォ・ユアンジ

ヤを描いた『スピリット』(06年)だが、そこで霍元甲を演じたのはジェット・リー(『シネマルーム17』85頁参照)。これには、きっとドニー・イエンも悔しい思いをしていたはずだ。しかし、そんな彼が今回射止めた役が、本作におけるブルース・リーの師匠であり1972年に死去したイップ・マンの役だ。

霍元甲が1910年9月14日に上海で開催された史上初の異種格闘技戦で2mを超すアメリカの巨漢レスラーと闘い勝利したのなら、イップ・マンは世界チャンピオンのイギリス人ボクサーと異種格闘技戦を闘い見事に勝利!一方ではそんなジェット・リーとドニー・イエンのライバル物語に興味を持ちつつ、今回はじめて知ったイップ・マンという人物に迫ってみたい。

## ■□■ 1950年代という時代の香港に注目! ■□■

『スピリット』が描いた霍元甲は清朝末期の実在の武術家だが、本作は広東省から妊娠中の妻と共に移住してきた1950年からのイップ・マンを描く。イップ・マンが武術家として生きていこうとしているのは詠春拳だが、弟子を募集してもなかなか応募者は現れない。映画冒頭スクリーンはそんな1950年という時代の香港のまちを映し出すが、香港が中国に返還されたのは私がはじめて香港旅行した1997年だから、1950年当時の香港はれっきとしたイギリスの植民地。したがって、中国人の警察署はあるものの、香港警察署長ウォーレスの顔をうかがっているばかりだ。

1945年に敗戦を迎えた日本は、アメリカの占領下で想像を絶する混乱の中戦後復興を成し遂げた。そして1951年9月にはサンフランシスコ講和条約を結ぶとともに、1950年6月から始まった朝鮮戦争がもたらした特需によってその後の



2011年6月2日(木) ブルーレイ&DVD発売  
『イップ・マン 序章』  
価格: 3,990円(税込)  
発売元: 日活 販売元: ハピネット

高度経済成長の礎を築いた。しかし、1950年という時代の香港の状況とは？本作を鑑賞するについては、そんな視点も不可欠だ。

## ■□■弟子には礼儀から教えなければ・・・■□■

私は中学生の時に富田常雄の小説『姿三四郎』を読んで感動した。これは黒澤明監督の名作で監督デビュー作でもある『姿三四郎』（43年）の原作だが、講道館柔道の創始者である嘉納治五郎がそこで強調しているのは武道における礼儀の大切さだ。1964年の東京オリンピックの年にテレビ放映され、私が唯一観ていたテレビドラマが『柔』。その主題歌で、美空ひばりが歌って1965年の第7回日本レコード大賞を受賞した名曲『柔』の、「勝つと思うな 思えば負けよ」から始まる歌詞にも、その一端が表現されている。

本作冒頭では、同郷の友人で新聞社の編集長をしているリャンの好意で新聞社の屋上に詠春拳の武館を開いたものの、入門者がなかなか現れず、家計にも困る IPP・マン夫婦の姿が描かれる。あるきっかけで第1号の弟子になる若者はウォン（ホァン・シャオミン）。IPP・マンに心酔したウォンがたくさんの若者を引き連れて弟子入りさせたのはいいが、香港の武館を仕切る洪拳の師範ホン（サモ・ハン・キンポー）配下の弟子とある日、大ゲンカに。武術を覚えたての若者は得てして自分の実力を試してみたくなるものだが、師匠たるものは技を教える前に礼儀を教えなければ。IPP・マンと嘉納治五郎を比較して、ついそんなことを・・・。

## ■□■ホンはイヤな奴？それとも・・・？■□■

1950年当時の香港はイギリスの植民地だから、イギリス人が威張っていたのは当然。しかし、そうだからといって賄賂を当たり前のように要求するのはいかななもの。

IPP・マンから見ればホンは香港の武館を仕切る巨大な存在だが、香港警察署長ウォーレスの言うことを何でも「ご無理ごもっとも」と聞き入れなければならない地元の警察署が大変なら、師範たちから集めた金を賄賂としてウォーレスに納めなければならないホンも大変。師範たちとの勝負という「テスト」に合格した後、IPP・マンは「金を取めることを条件として香港で武館を開設するOK」の了解を得たが、IPP・マンはそれをキツパリと拒否。たしかに建前はそうだが、香港の武館をまとめ維持していくためには、そんなキレイごとだけでは・・・。

そんな価値観の相違で当初IPP・マンとホンは対立したが、互いを十分意識し合ったことはたしか。そんなホンは、イヤな奴？それとも・・・？

## ■□■香港でボクシング大会を開催した意図は？■□■

本作にはハイライトシーンが2つある。その第1はウォーレスが香港で開催したボクシング大会においてハプニング的に発生した、ボクシング世界チャンピオンのツイスターと

ホンの対決。ツイスターから中国拳法を「ダンス」と罵倒されたことに、ホンの弟子たちが怒ったのは当然だが、ボクシング大会の「前座」として演じられている演舞をみると、たしかにそんな感じがしないでもない。シルベスタ・スタローンを一躍世界的俳優にさせた『ロッキー』シリーズにおける、試合に向けてのロッキーの身体の鍛練の様子やその結果として実現した筋肉隆々とした身体とスピードを両立させたたくましさを見てみると、小柄な中国人たちではとてもツイスターに太刀打ちできないはず。しかも、洪拳のホン師範はたしかに強いのだろうが、腹の出っ張った体格をみていると日々トレーニングに励んでいるとはとても見えず、その肉体を比べただけで、その敗色は明らかだ。タオルを投げようとするイップ・マンを制して、中国武術と武闘家の誇りを守るため、打たれても打たれても倒れないホンの姿は感動的だが、これでは・・・。

それにしても、なぜウォーレスは香港でボクシング大会の開催を？これはきっと、よりイギリスの支配力を強めるための「仕掛け」だろうが、ボクシング大会におけるホンの死亡という結果は中国人の反イギリス感情を増幅させたただけだから、ウォーレスの狙いは完全に失敗？

## ■□■ルールづくりが大切！蹴り技あり？寝技あり？■□■

ここ数年大晦日では紅白歌合戦の視聴率が落ち、裏番組であるK-1とDynamiteの視聴率が上がっている。異種格闘技に最初にチャレンジして国民的人気を集めたのは、アントニオ猪木だが、私たちが固唾を吞んでテレビの前で見守った1976年のアントニオ猪木VSモハメド・アリの異種格闘技戦は完全な凡戦となった。だって、立ち合っただけのパンチ合戦では勝ち目がないとみた猪木は、最初から寝ころがってワザをかけるチャンスを狙うだけだったのだから。そんなこんなの体験を経て、現在のK-1とDynamiteでは細かなルールが決められている。

ツイスターの挑発を受けて、静かにこれを受けたのがイップ・マン。イップ・マンには今2人目の子供が生まれようとしていたが、挑戦が決まった以上、そんな家庭内のことに煩わされてはダメで、何よりも練習が大切。しかし、私に言わせればそれ以上に、ボクシングVS詠春拳の闘いについては、何よりもルール作りが大切だ。アントニオ猪木のように最初から寝ころがらないとしても、技の流れの中で寝技はあり？また、キックボクシングのような蹴り技はあり？この2つがOKなら、いくらスピードのあるパンチを放つツイスターでも、一度リングに横にしてしまえば、あとはイップ・マンの楽勝。そう思ったが、さあ世紀の対決を前にしても私には肝心のルールが不明確。これでは、勝負の楽しみが少し減殺・・・？

## ■□■「ジェントルマンの国」が、あと出しジャンケンを？■□■

12月から始まったNHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』第2部の第1回は、日英同

盟がテーマだった。南下圧力を強めるロシアに対抗するためには、日英同盟の締結が不可欠。対露開戦をやるなと考えた桂太郎総理や小村寿太郎外務大臣はそう考えたが、前総理たる伊藤博文の対応は？それはドラマを観て勉強してもらいたいが、あの当時から今日までイギリスは紳士の国、ジェントルマンの国と言われていたはずだ。

ところが、本作最大のハイライトシーンで、少ツイスターの分が悪くなると、審判団は協議に。当初の申し合わせでは、レフリーはイギリス人と中国人が共同で務めるとされていたから、勝負ゴトで何よりも大切な審判の公平性は保たれたと考えていたが、何とこの審判団はウォーレスとも協議した上、試合の途中で蹴り技禁止と言いはじめたから、そりゃ無茶苦茶。試合中盤ツイスターも打たれて大変なら、 IPP・マンだって数発のパンチを浴びているから大変。そんな中であと出しジャン

ケンを提案するとは、ナンセンスきわまりない。IPP・マンはその不当性を広くアピールし試合は中止。当然そんな選択肢もあるはずだが、それでは映画としては面白くない。『ロッキー』シリーズでは、打たれても打たれても奇跡のように立ち上がるロッキー・バルボアの肉体力と精神力が感動を呼んだ。それはまた、近時映画化されるらしい私たち団塊世代が大学時代に愛読したマンガ『あしたのジョー』における矢吹丈も同じだ。しかして、本作でもあと出しジャンケンによるルール変更後、IPP・マンは次々とツイスターのパンチを浴び何度も倒れるが、最後には・・・。

つい、そんなシーンを想定したが、考えてみれば、ボクシングでは一発の必殺パンチが当たればそれで大逆転が可能だが、詠春拳は手数で勝負するもの(?)だから一発逆転はとてムリ。さあ、ルール変更後の「世紀の対決」の行方は？



2011年6月2日(木) ブルーレイ&DVD発売  
『IPP・マン 葉問』  
価格:3,990円(税込)  
発売元:日活 販売元:ハピネット

2010(平成22)年12月14日記